

集中日本語 1 におけるコース開始時の問題 ー学習者特性と教科書の学習項目の観点からー

鈴木 庸子

1. はじめに

I C U日本語教育プログラム (Japanese Language Program 以下 J L P) の集中日本語 1 のコースは、J L P設立以来40年の歴史をもち、I C Uで学位を取得しようとする留学生のための集中日本語教育の要となってきた。コースのカリキュラムは、1950年代から1990年代まで、1 週間22コマ、「大学生のための日本語 (Japanese for University Students)」をテキストとして1日1課、1課につき「文型練習・口頭練習・漢字の読み書き・ラボ」の4種類の授業がそれぞれ1 コマずつ組まれていた。このカリキュラムは、伝統的に採用されつづけ、またこの間コースのコーディネーターも変わらなかった。

しかし、ここ10年ほどの間の語学教授法の変化を反映して、プログラムの体制、カリキュラム、授業内容に変更が加えられた。現実のコミュニケーション能力の養成に目が向けられるようになり、J L P編集の新教科書「Japanese for College Students:Basic (I C Uの日本語)、vol. 1,2,3」もそのような変化に合うように作成された。

同時に、このコースを受講する学生のタイプにも変化が見られるようになった。I C Uで学位を取得する4年本科生は少なくなり、代わりに交換留学生としてI C Uに在籍する1年本科生が増えている。この変化には、特に香港からの奨学生を受け入れる制度が1996年度より廃止されたこともひとつの原因になっている。

集中日本語 1 のコースはこの2つの変化に対応できるカリキュラムと授業の内容を現在試行錯誤している状況である。そこで本稿では、1996年度および1997年度の集中日本語 1 のコースについて、特に受講学生の特性および新教科書の内容に焦点をあてて、コース開始時における問題点を検討し、解決のための提案を行いたい。

2. 集中日本語のコースの説明

2-1 カリキュラムと学習内容

集中日本語のコースは、現行のシステムでは秋学期から春学期までの3 学期を通して「集中日本語 1、2、3」の3 コースが開講される。「集中日本語 1」はこのシリーズの最初の初級のコースであり、中級前半と中級後半の「集中日本語 2 および 3」がこれに続くことになる (注1)。

1997年度のコースシラバスおよびコースのスケジュールを資料1 および2 に示す。このコースでは教科書にそって30 課を1 学期で終了する。1 日4 コマから5 コマの授業時間

数で、1課について4コマ（初めの5課の間は5から6コマ）、家庭学習時間に4時間を想定している。復習に2時間、内訳は単語と漢字の復習に30～40分、テープを聞くことに30分、文法の復習に30～40分、読解教材の復習に30分である。その上で、予習に1～2時間、内訳は、単語と漢字の予習に30分、文法ノートを読むことに20分、テープを聴くことに30分、である。効果的な学習のためには、毎日同じペースで単語、漢字の連合学習、文法の実理解、発音練習などを行う必要がある。

学習項目の数は、読解練習のためのパートを除いて、概算で語彙数1300、漢字数400、文型数200である。扱っている場面には、買い物をする場面、駅で切符や新聞を買う場面、電話で伝言する場面など学生生活に必要な状況が取り上げられ、依頼、誘い、説明、助言などの機能とともに提示されている。

評価の方法は、学習内容に記憶学習が多いことからリインフォースメントをかねて1課ごと（したがって毎日）の小テストを漢字と文法について行い、5課ごとに大きなテストを行う。大きなテストでは、漢字と文法のほかに聴解、読解、スピーキングの3つの技能についてもテストする。

文章を書く技能については、別途に「作文」の授業を設けてあり、その提出物のでき具合で評価を行っている。

このような内容で学生は15単位を取得することになっている。

2-2 他の大学と比較した本コースの特色

この集中日本語のコースの特色は、大学生になるまでまったく日本語を知らなかった学生でも、4年間でICUを卒業することが可能となるということである。要覧には、このコースを次のように説明している。

日本語の話しことば、書きことばの初、中級コース。会話、文法、かなと漢字の読み書きの練習。コミュニケーション能力を身につけることを重視。

1は週22限、2、3は週15時限。（『国際基督教大学要覧1996-97』 p.22）

このようなシステムは、他の高等教育機関ではほとんど見られない、ICU独自のシステムである。一般的に、他の大学で学位取得をめざす大学生は、入学時に一定以上の日本語能力を要求されるのが普通である。そのため、国立大学に奨学金で留学する国費留学生の場合は、大学生としての資格を与えられる前に1年間国立の予備教育機関あるいは、各大学の留学生センターなどで日本語教育を受ける。この教育を「予備教育」と呼んでいる。また、多くの私立大学の場合は入学資格の中に日本語能力試験1級合格であることを求めている。そしていくつかの大学では、この1級レベルの日本語力を養成するための予備教育を、別科として設けた機関で行っている。

ICUと同様のシステムを取り入れている大学は唯一姫路獨協大学である。小出（1997）は、姫路獨協大学の特色を次のように述べている。

この新設大学における日本語教育の専門課程は私立大学では初めての設置であり、大学の大きな特色となる。留学生教育にも重点を置き4月入学に加えて10月入学制度を導入する。10月入学の留学生は日本語能力ゼロでも入学させ、4年間で日本語学科の課程を修了し、卒業できるようにした。この種のカリキュラムは国際基督教大学を除いては全国でもユニークなものである。姫路獨協大学では正規の留学生以外に姫路市の姉妹都市である太原（中国）とクリチーバ（ブラジル）から委託学生を受け入れている。（後略）（『日本語教育論文集 小出詞子先生退職記念』p.22）

I C Uの集中日本語は、大学の教養学部の中で日本語教育を行い、受講生には大学生としての身分と権利をあたえ、取得した単位を正規の第一外国語の単位として認めている。これは、小出が述べるように日本の大学の中でも非常にユニークなシステムをとっていると言える。ただし、そのために初級を3か月で終了し、1年半で一応上級を終了しなければならないという、まさに「インテンシブ」なコースとして存在する。これは、長い間、4年間の奨学金でI C Uを卒業する香港からの留学生にとって非常に重要な機能を持っていたと言える。

3. 受講学生の国籍、学習歴、来日の目的など

次に、1996および1997年度の2年間に、集中日本語1を受講した学生について説明する。

受講した学生数は、それぞれ11人、10人、そのうち4年本科生がそれぞれ3人、1人、他は1年本科生、研究生、教員家族である。ただし、1996年度の4年本科生は、4年本科生として入学してはいるがI C Uでの学位取得をめざさず、J L P終了後退学している。このような学生にとって、受講の目的はしたがって、祖父母や母または父の言語である日本語と日本文化を学ぶ、つまりアイデンティティの形成の一環として日本語を習得することに主眼がおかれている。他の4年本科生および交換留学生、研究生の場合は自分の専門のため、あるいは経験のために日本語を習得することを目的とし、教員家族の場合は日本で生活するための日本語を習得することを目的としている。結果的に3種類の目的が混在していることになる。

学習歴は、まったくの初学者が1996年度、97年度にそれぞれ3人、3人で他は3か月から1年程度の日本語学習歴がある。

国籍は、アメリカ、ドイツ、デンマーク、イギリス、カナダ、フィリピン、香港、フランス、インドネシアである。この中で日本と外国との2重国籍をもつ学生が2人、日系人が1人である。

4. 問題点

集中日本語のコースは、4年間で大学を卒業しなくてはならない留学生の状況を考えて、総合的に考えて大変うまく運営されているコースである。しかし、現行のカリキュラムのなかでは学習者特性としての学習歴の違いと、初期の段階の学習項目の多さから、特にコース開始時に問題が起こっている。そこでその点について考察する。

4-1 開始時の日本語学習歴の違い

JLPを受講する学生は、9月の学期はじめに強制的にプレースメントテストをうけて各人の適するレベルのコースに振り分けられる。このとき、集中日本語1を受講する学生はもともと日本語能力のレベルがゼロと想定されるのでこのテストを受ける必要がない。

ところが、すでに数カ月から1年程度の日本語学習歴を持っていて集中日本語のコースを希望する学生がいる。もしこの学生の日本語のレベルが中級のレベルである集中日本語2に達していれば、集中日本語2に振り分けられる。しかし、テストの結果、中級のレベルを受講するには学習歴が浅い、あるいは学習到達度が不十分と判定された学生は問題が複雑になる。

表1 集中日本語のシリーズで速く勉強したい学生の受講コース

学生のレベル (P・Tで判定されたレベル)	秋学期の受講コース	冬学期の受講コース	春学期の受講コース
初学者 (初級) 日本語1 日本語2 日本語3	集中日本語1 日本語3	集中日本語2 集中日本語2	集中日本語3
(中級)	集中日本語2		

現在、JLPには集中日本語よりゆっくりのペースで進む「日本語1～7」のコースが用意されている。集中日本語1はこのコースの「日本語1、2、3」とレベルの上で対応する。そこで、プレースメントテストで「日本語1」あるいは「日本語2」のレベルと判定された学生で集中日本語のシリーズを希望する学生は、日本語力がゼロでなくても集中日本語1を受講させざるを得ない。「日本語3」のレベルに達していると認められた学生で集中のコースを希望する学生には、秋学期は強制的に「日本語3」を受講させ（集中日本語1は受講させずに）、冬学期から集中日本語2を受講させている（表1）。

このため、集中日本語1のコース開始時に学生の日本語力は、必然的に「初学者」「日

本語 1」「日本語 2」の 3 レベルにわかれている。この学習者特性の差は教授上無視できない大きな開きとなっている。

まったく日本語力がゼロの学生と、日本語 1 あるいは 2 のレベルと判定された学生の状況の違いをみるために、コース開始から 14 日目には初めて書いた作文を比較してみよう。(ほぼ原文のまま。ただし表記の誤りは筆者が訂正した。)

◆ I C U で初めて日本語を始めた学生 (初学者) の作文

私のりょうは古いです。それに、きたないです。でも、私のへやはひろいです。りょうの生活はむずかしいです。でも、おもしろいです。りょうはべんりです。りょうは大学のキャンパスにあります。

◆ 日本語 2 のレベルと判定された学生 (既習者) の作文

私は、アパートですんでいます。アパートは、ずっと新しいですが、小金井であるから、少し不便です。大学から、自転車で、10分ぐらいです。でも、雨があたら、20分ぐらいです。

アパートは、きれいなアパートです。それに安いです。(5万1千円です)

アパートで、テレビとステレオがあるので、とてもいいです。それから、広いです。でも、日本の友だちは、こどもをたくさんありますから、しずかじゃありません。(下線はまだ教えていない項目)

このように、この時点での日本語力の差はこれほど歴然としている。初学者の場合にはこの時点までに学習した単語と構文をすべて使いこなしている。これに対して既習者は、すでにこの時点のレベルをこえた単語力や構文力をもっていることがわかる。この日本語力の差は、コースが進むにつれて狭まりゼロだった学生が、既習者の日本語レベルに追いつけば解消する。2 か月後の作文の一部を比較してみる。

◆ 初学者 (2 か月目)

日本についたとき、何がいんしょうぶかかったですか。漢字は一ばんいんしょうぶかかったです。私は漢字をきれいでおもしろいと思います。日本の人がじぶんととても、ちがっていたことがとてもいんしょうぶかかったです。たとえば、日本の人はしんごうをまもります。でもフランスの人はしんごうを守りません。日本についたとき、日本の食べ物はいんしょうぶかかったです。フランスの食べ物と日本の食べ物はとてもちがいます。日本ではたくさんの食べ物が生です。それに、日本の料理をすきです。(後略)

◆ 既習者 (I C U で 2 か月目)

日本に来ておどろいたことがあります。もちろん日本とアメリカは違います。食べ物や飲み物や車や自転車やトイレはちがいます。

このことからアメリカで私が全部はちがうと思っていました。でも全部ちが

いません。ふたつのことはとてもおどろきました。

まず、アメリカで日本人はとてもいい人と思いました。強いろうどうしゃとていねいな人々がいます（と思っていました）。だから道にごみを見ると、とてもおどろきました。日本の道にぜんぜんごみがないと思っていました。（後略）（ ）内は筆者の加筆

このように、2か月ほどすると初学者の日本語がかなり既習者においついてきていることがわかる。

この現象は、当事者以外のものには当然のことと受けとめられ、何も大きな問題があるとは考えられない可能性もある。

日本語1や日本語2のレベルと判定された学生が、自分のレベルにあったコースはペースが遅いという理由でこれを希望せず、速いペースで進む集中日本語のシリーズを希望するのであれば、集中日本語1の初めの1、2か月の間、足踏みをするのはしかたのないことである。しかもこの現象は、様々な学習歴をもつ日本語学習者を受け入れる限り、どのレベルのコースをとっても、日本語力の差の大小はあっても必ず起こることである。逆にいうと、ひとつのコースの学習者のレベルを均質に保とうとすることこそ不可能なことであり、非現実的なことである。

しかし、実際に日々の授業を行う現場に立ってみると、日本語力ゼロで始める学生と若干の日本語能力がある学生との混成クラスを運営することは、非常に難しいことがわかる。

たとえば、ひらがなやカタカナ、あいさつのことば、最も基本的な会話（「わかりません」、「お手洗いはどこですか」等）に最低6コマ程度が必要である。この時間にたった6コマだからということで、また、既習者と言っても本当にどの程度正確に文字がかけるか、発音ができるかなどを確認するためにも既習者に授業への参加を求めている。クラス運営の観点から受講生の人間関係に配慮している面もあつてのことである。

ところが、このような最も基本的な学習項目からやり直すことは、既習の学習者は退屈させてしまい、ゼロで始める新しい学習者の気持ちはあせらせてしまうことになる。同時にゼロで始める学習者は「自分ができなくても当然」という気持ちにさせ、既習の学習者は「勉強しなくてもできる」とう気持ちを持たせてしまう。この意識がどちらのタイプの学習者に対しても適切な学習態度の形成をはばむ例が生まれてしまうのである。

4-2 学習項目の多さ

次に、集中日本語のコース開始時の2番目の問題点は、学習項目の多さである。使用教科書である *Japanese for College Students; Basic* の「pre-lesson」と呼ばれるひらがなとカタカナの読み書きが定着するまでには、授業時間で6コマ、家庭学習時間1日2時間程度として数日を要する。

さらに、*Japanese for College Students; Basic* の各課で覚えなければならない単語数、

文法項目数、文法ノートのパージ、漢字数を調べてみると、特に単語数と文法項目数で開始時の分量の方が、コース後半に比べて格段に多くなっている（図1、図2）。

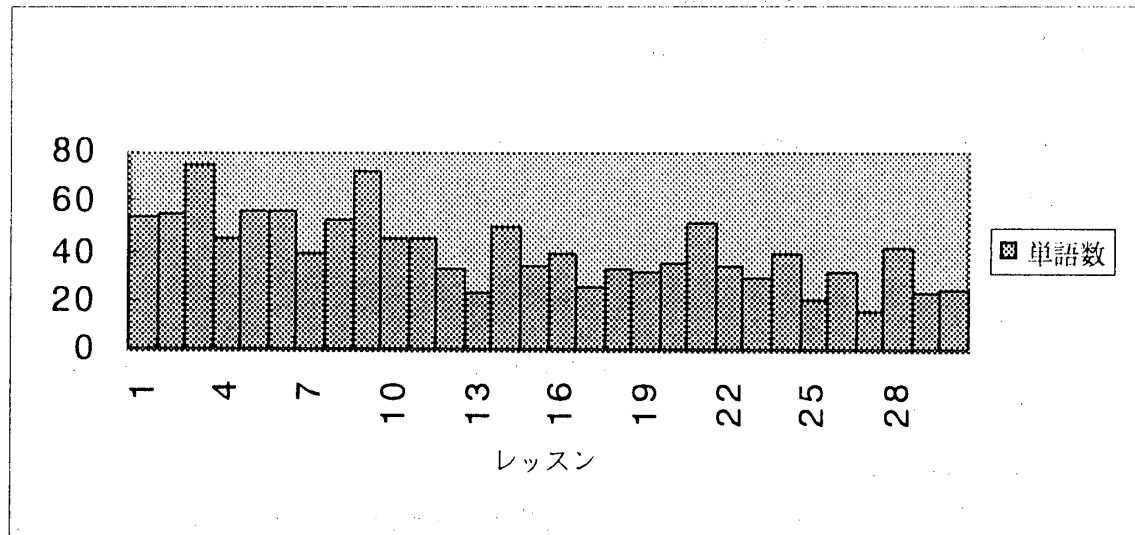


図1 レッスンごとの単語数

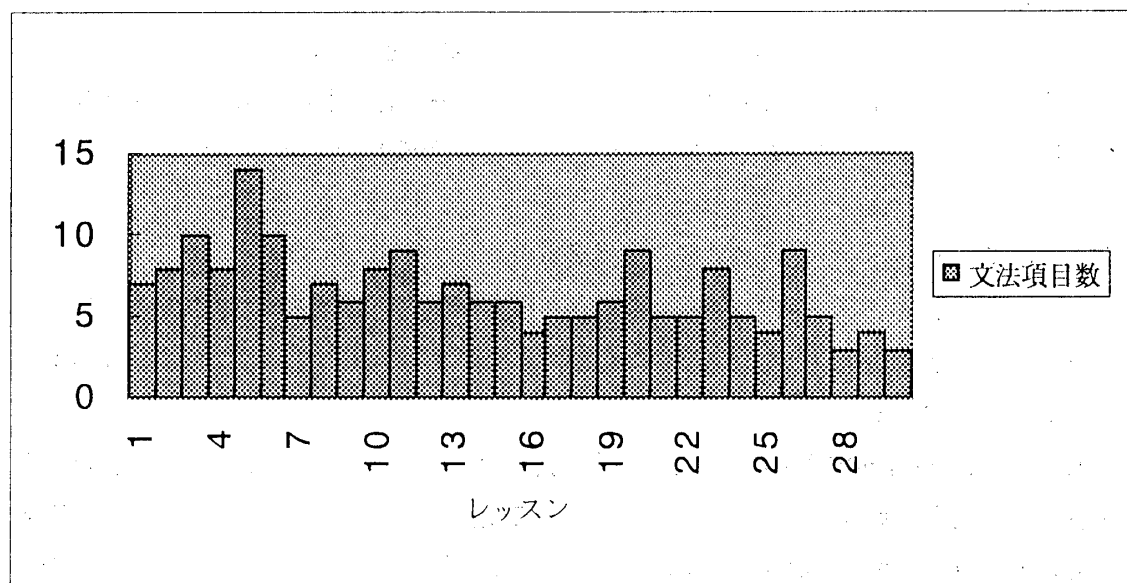


図2 レッスンごとの文法項目数

カリキュラムの組み方として、当然、学習項目の多い課に多くのコマ数をかけることは可能である。実際、初めの5課は、それ以後の課に比べて約2コマずつ多く時間をかけている。しかし、それでも初学者にとって初めの5課の負担は非常に大きい。この5課の中に日本語の最も基本的な文の「型」が導入され、その上、数字と時間、月日の言い方が導入されるからである。

この初めの部分の学習量の多さはある程度いたしかたのないことであり、どのような教

科書をみても同じ傾向がある。しかし、そこでこの部分にあまり多くの時間をかけると、先に述べた既習者が足踏みをしなくてはならない時間が増えてしまう。この教科書の構成は、既習者にとっては、初めのところを一気に復習できるという点で有利であり、逆に初学者にとっては負担の大きいものとなっている。

5. 解決のための提案と問題点

5-1 提案

集中日本語 1 のコース開始時の問題は、学習者特性として受講者の日本語力に差があることと学習内容が多いという 2 点が最も大きな問題である。

もし、JLP のカリキュラムが現行にのっとって行われるとするならば、その対策として次の提案をしたい。

1) 「pre-lesson」を義務化する。

コース開始時に、初学者と既習者との日本語力の差を極力少なくするために、プレースメントテスト、コースオリエンテーション、履修登録日に初学者のための「pre-lesson」を義務化する。

このpre-lessonでは、ひらがなとカタカナの表記および発音、あいさつ、自己紹介、ごく基本的な会話を行う。1日2コマ、3日程度でカバーできると考えられる。その後、正規の学期開始時には、文字表記とあいさつ、簡単な会話が履修済みの状態で第1課からコースを始める。

2) 診断テストを行い、既習者に対して授業を免除する。

開始後、各ステップごとに、基本的な項目について習得している学生をクラスから帰し、まったくの初学者だけの時間を作る。習得しているかどうかのチェック機能を、クラスの中にシステム化する。

たとえば、「～は～です」の文型、その質問、否定など最も基本的なことから、日にちの言い方、数字、曜日の言い方など、について口頭練習を同時に行うと、初学者が既習者の間にうもれてしまい、既習者は無駄な練習を行い、初学者は練習量が不十分になったまま終わってしまう。

そのような事態を避けるためにプレースメントテストよりも極めの細かい文法項目や語彙、漢字の診断テストを用意し、合格者はその授業を免除する。

3) 既習者の履修項目の調査を行う。

既習者にとって、このコースの学習内容は、過去に学習したが習得が不十分なことから、全く初めて学ぶことがらがiriまじる形になる。このコースが初学者を対象としたコースである以上、すべての項目が初めて、というのが建て前ではある。しかし、既習者がクラスの半数以上を占め、習得度が不十分なので復習のためにもう一度やり直したいと考え

ている学生を無視しては、コースの運営が不可能な状態だと言える。

コースの運営にとって、既習者の日本語能力の実態を把握してコース運営に積極的に活かすことが、最終的には初学者の立場を明確にし、その学習をよりよく支援できることになると思われる。

5-2 初学者のみのコースにした場合の問題点

これまで、現行のカリキュラムを継続した場合の解決法を提案した。しかし、もっと抜本的な対策としてたとえば、このコースを初学者と日本語 1 のレベルの学生のみ受講者を限ることは可能である。ところが、この場合には、また別の問題点が生まれると思われる。この点について考察したい。

まず第一に初学者と日本語 1 のレベルの学生に受講生を限った場合、その人数が十分でなくてはならない。今年度のコースでは受講者10名のうち、全くの初学者は2名、ひらがなだけは書ける状態で来日した学生が1名である。プレースメントテストを受けて日本語 1 のレベルと判定された学生は3名である。このあわせて5名のためにスタッフ5名、週22コマのコースを運営するのは授業として非効率的であると思う。

したがって、初学者のみのコースとして開講するためには初学者の人数がそろう必要があり、そのためには、学生のリクルートの面で行政的に大きな努力が必要である。

第二に、本来このコースを初学者だけに受講者をかぎった場合、次のような学生側の不利益がある。それは、初級の文法を復習した上で、速く進む中級のコースで学びたいと考える熱意のある学生にチャンスを失わせるということである。

日本語 2 のレベルと判定された学生が集中日本語 1 を受講しないとすると、日本語 2 (秋学期) → 日本語 3 (冬学期) → 日本語 4 (春学期) という履修計画で進むことになり、1年間の来日期間に中級の一番初めのレベルすなわち中級の4分の1までしか到達しない(中級は日本語 4、5、6、7の4レベルがある)。もし、集中日本語のシリーズに乗って勉強できれば、1年間で中級の最後まで、つまり日本語 7 のレベルに匹敵するレベルに到達するのに比べ、非常に学習効率が悪いのである。

そこで、仮にこの問題の解決として春学期に集中日本語 2 を開講する、という新しいカリキュラムを考えることが出来る。日本語 2 (秋学期)、日本語 3 (秋学期)、集中日本語 2 (春学期) という受講計画ですすみ、1年間で中級の半ば、先のレベルで言えば日本語 5 に匹敵するレベルまで到達できる。しかし、この問題はやはり受講者数が十分であるかどうかである。1997年度の9月に日本語 2 に判定されて、速く進みたいために集中日本語 1 を受講した学生は5名である。この5名が日本語 2、日本語 3、集中日本語 2 の順番でコースを履修したとしてもその人数は数名でしかない。数名のためにスタッフ3~4名、週15コマのコースを開講することは、やはり非効率的ではないだろうか。

このように、受講者のレベル差の問題を解決しようすると、受講者の日本語レベルに

あわせてコースの種類をふやす必要性が出てくるのであり、コースの種類を増やすためには、そのコースに十分な人数の受講者が必要だということになる。

留学生数に関して大幅な増員が見込まれないかぎり、小手先の対応ではあるが、前節でのべたような、集中日本語1のコース内での対処が適当ではないかと思われる。

6. おわりにー集中日本語コースの意義

集中日本語コースの意義は、国際性を重んじる大学として日本国籍の学生だけでなく外国籍の留学生に対しても親切なカリキュラムを用意しているという点にある。「親切な」という意味の一面は、高いお金を払って語学教育専門の機関（日本語学校や大学の別科など）を利用しなくても、大学の単位として日本語の学習の機会が与えられ、教室の外では大学生としての生活が保障される、ということである。今後ICUに留学する外国人学生で、特に学位取得をめざして入学する学生は、日系人の子女、日本と日本以外の国との2重国籍をもつ学生、外資系企業の関係者の子弟など、社会の中の少数のケースであっても将来二つの文化の架け橋として巣立っていく人材であろうと思われる。そのような人材を育成していくために貢献できるのであれば、このコースの意義は大きいのではないだろうか。

最後に、もう一度、小出（1997）から大学の集中日本語コースの意義について引用したい。

大学で初級からの日本語教育をする利点は、（1）語学校などで予備教育を受ける必要がなく留学生の日本での学習期間が短くてすむのみならず、基礎をしっかりと身につけさせることができること、（2）日本語教師養成プログラム受講生（主専攻学部学生、大学院生）に初級クラスを見学させることができ、さらに大学院の学生に実習の場が提供できることなどである。（『日本語教育論文集 小出詞子先生退職記念』p.22）

現在、日本の大学では国立私立を問わず、国際化が問われ留学生教育が試行錯誤されている状況だといえる。ICUの集中日本語は、実質的にICUの留学生を育ててきたコースであり、留学生にとっては大きな意味があったはずである。このカリキュラムが他大学で採用されないのは、大学のカリキュラムの問題、授業を担当する教員スタッフや職員スタッフの問題、留学生の生活を支援する体制など、周辺的にハードルが高いためではないだろうか。今後ICUの中では、集中日本語のコースを大学に於ける留学性教育のひとつのモデルケースとして、時代にあわせて成長させていくことが必要だと思われる。

注

- 1 集中日本語2（秋学期）、集中日本語3（冬学期）、上級日本語（春学期）という中級

レベルの日本語から始まるトラックも用意されている。

参考文献

- 小出詞子（1997）「小出詞子年譜」『日本語教育論文集 小出詞子先生退職記念』凡人社
I C U日本語研究室（1987）『あすの日本語教育の道を求めて』凡人社
国際基督教大学（1996）『国際基督教大学要覧1996-7』

1997 Intensive Japanese 1
(L IJ041JE, IJ042JE, IJ043JE)

Course Description

Goal:

Intensive Japanese 1(IJ1) covers the pronunciation, basic structure, and basic vocabulary (about 2000 items) of the Japanese language. We will also cover reading and writing hiragana, katakana and the most frequently used kanji(about 400). By the end of IJ1, students should be able to express themselves in both spoken and written form at a level necessary for simple daily life.

Units:

IJ1 consists of 22 class periods per week and counts as 15 units.

Intensive Japanese(Content)1	8 units
Intensive Japanese(Writing)1	4 units
Intensive Japanese(Aural)1	3 units

Instructors:

Suzuki, Yoko	ERB2 123	0422-33-3223
Sugiura, Yukiko	ERB2 127	0422-33-3342
Tsubone, Yukari	ERB2 127	0422-33-3342
Kato, Yukari	ERB2 127	0422-33-3342
Hatanaka, Chiaki	ERB2 127	0422-33-3342

Office Hours:

Suzuki Yoko:	M. 2:50-4:00	Fri.2:50-4:00
--------------	--------------	---------------

Textbook:

Japanese for College Students:Basic, vol.1,2,3 Kodansha International

Tests:

There will be six tests this term. The tests will cover grammar, reading comprehension, aural comprehension, role play, Kanji and composition.

With regard to make-up tests, please refer to the JLP Regulations.

Quizzes:

There will be a short grammar quiz(formation quiz :FQ) and Kanji quiz (dictation style: KD) for each lesson according to the schedule. There will be no make-up quizzes.

Grade:

Your grade for this course will be based on the following.

Content(8 units)

Structure	Test (Grammar)	30%
	FQ(Grammar/Formation quiz)	10%
	Grammar exercise	10%
Comprehension	Test(Reading Comprehension)	30%
Speaking	Test(Roll Play)	10%
<u>Attendance and participation</u>		<u>10%</u>
total		100%

Writing(4 units)

	Test (Kanji)	30%
	Hiragana & Kanji Quiz	30%
	Composition	30%
<u>Attendance and participation</u>		<u>10%</u>
total		100%

Aural(3 units)

Test(Listening Comprehension)	50%
Video	10%
Attendance and participation	
(including Visitor session)	40%
total	100%

Daily Preparation and Review:

Classroom participation is mandatory since this course moves at a very fast pace. In order to participate actively in class, you should expect to do the following daily preparation:

1. Review the grammar of the previous lesson. (Listen to the tape of the key-sentences, formation and reading) (1 hour)
2. Study the grammar exercise sheet of the previous lesson. (30 minutes)
3. Review the Kanji of the previous lesson. (30 minutes)
4. Study the vocabulary and Kanji of the new lesson. (Listen to the tape of the vocabulary) (30 minutes)
5. Read the grammar notes of the new lesson. (30 minutes)
6. Study and listen to the tape of the key sentences and formation of the new lesson. (1 hour)

* You will take a standardized test (the 1996 Japanese language proficiency test, which consists of a Kanji & Voc. test, a Listening Test and a Reading & Grammar Test) level 3 at the end of the course.

These tests do not affect your grade.

資料 2

Intensive Japanese I
Autumn Term 1997

M	Tu	W	Th	F
9/1	2	3	4	5 登録 registration
8 Orientation Hiragana(1)	9 Hiragana(2) L1,Lab.Ori.	10 L1	11 L2	13 L3
15 敬老の日	16 L3	17 L4	18 L5	19 Review
22 Test(1)	23 秋分の日	24 L6	25 L7 (Word processor-1)	26 L8
29 L9	30 L10	10/1 Review Writing(1)	2 Test(2) (Word processor-2)	3 L11
6 L12	7 L13	8 L14	9 L15	10 体育の日
13 Review Writing(2)	14 Test(3)	15 L16	16 L17	17 L18
20 L19	21 L20	22 Review Writing(3)	23 Test(4) E-mail	24 L21
27 L22	28 L23	29 L24	30 L25	31 Review Writing(4)
11/3 ICU 祭	4 午前中休講 工場見学	5 Test(5) Joint Class	6 L26	7 L27
10 L28	11 L29	12 L30	13 Review Writing(5)	14 Test(6)
17 Skit	18 Proficiency test			